重鐫

日本茶経記

夏

76
1559
3

京都帝国大学図書之印

京
1552
3

日本紀附記巻之四

夏

漢書律暦志ニいはく夏ハ假なり假ハ大なり物皆假大なりとし
ハ万ものなり和雅ニ云と精明と云○和雅ハ云とかつと訓せ
しハあつと訓ことなりなり
あしお面す器鬱乃義とおなし

素問ニいはく云三月これを蕃秀といふ天地氣交を
萬物華榮す夜ニ臥し早く起き庭前ニ散髮して
ゆるくして形を志とし
天氣をもつて生とし
逆し生を絶るを殺伐ニ云氣衰るをおこりて
生を送ることを傷て生を收を
者かし

千金方にいはく凡の面にはくらてみるのなら
人をして面皮あつく癖をまつ風をあらしむ
又曰 凡七月二月昔の時食物をもつて辛をまして
脚弱と書へし
内経にいはく凡月冷石鉄物たとへ枕とし源と立るの
なれたに人の目と換と
書に海にいはく凡代薬に藥あり草あり菽を食
これとをもつて藥とす一なりへし
金匱要略にいはく凡鱠肉と食るのとをはくい
死事我蓋春と犯さん宜く苦蓼と食べしいはく

これと等しし
月令廣義にいはく凡むしり九月より下てはくつ切濁物物
及水とのむるとを忌又ものをして鹽漬をしるべし
又いはく凡月腎氣衰絶をあよ房色を慎とんば元
氣を傷り毒と接り宜戒之
又いはく汗の衣裳よ逆ちとをふ晒又これとを
出いるのを痛るとまん
妻の書養書にいはく盛暑藥を飲む冷水をもつて洗
ごとく脳と牝牡をむしはくや沐浴をしるやの切よ
夢はへし又冷水をもつて澄へし

又いとく夏は暑熱に冒されて生邪をくうす鬱とれい瘧
とも云し冷を生じて瘧と生す
又曰夏月は心脾じ腎衰ふ精化して水となり秋冬に
外凝化保嗇して清氣を固とし寒邪をとくへ
腠中溢脹あり生瓜果茄氷水冷淘粉粥餅蜜瓜含
へり飲食と食をれは多くは秋冬に瘧痢をうしなふ
冷水といく沐浴して面を洗ひ背を淋く事なれ
人をして鬱熱眼睛く筋脉腠理霍乱水筋清黄
乃痢とゆ女心風を発く邪なるなれ眠中を人に
ちく扇と揮しむる事なるを汗孫毛孔開展ちく風邪

へ入りこれと婦人をして風痺石仁言治蹇澁の疾
と為しむ年壮にして即寒とをなくして亦病根
を種ちなり氣衰ちる人を様教乃寒を逆ぢるのごし
酸中よろしくこれとをくし
強き人をいとく夏月間に供清冷水とのを瓜桃生冷
の物宜くのく食しかくれちくとれを秋冬瘧痢
をまつふ事とまあるなり
夏月暑に傷られく身弱たれりく瘦ちる人に伝
これを夏瘧といふ病症よりく薬と服すし
又万桑葉十匁大伸茶枳嗽瘦人一斉に

石麻呂爾吾物申夏痩尓吉跡云物曽武奈伎
取食　鰻鱸を乃夏痩と治とる事醫書にあり
足文作り給へ給へ

四月　立夏　卯月乃節　小滿　四月の中　○四月の異名　孟夏　余月
乾月　維と仲呂といふ　○四月乃和名とかつきと云和の故実
ひとつゆ　ひとつゆ　ひとつゆ　ひとつゆ　ひとつゆ
時雨　ひとつゆ　と奥義抄にみえたり

朔日　國信今日より月四日まで袷と羽織とを
ぬぐといふ吉日にて出ぬくよしあり

八日　浴佛日なり灌佛ともいふ佛像を
ゐよ都梁香とふくまれる水にて灌仏を
色あらとて丘洋香とふ香水にて洗ふ事とい

て黄色水にて安息香とふく黄色水にて佛頂を
洗ふくとそれより月建れ始るすハ洗ふ事ぬ
な朝ふく今日佛に水を注ぎ推古天皇
の御宇にはじまるなん

十五日　浴屠の結夏今日より十五日より
いとりて終る日と解夏と云ふ乃九十日安居を外
よあすの末豊新号と申ゆゑん事とわろく有
たりを釈苑に那伽乃ふんえうり

晦日　沐浴

今月梅雨に先立て屋乃漏をやうよ除め侍へしと

四家廣より乃そ〻うげよ書き霜毎ちゝく五月五
梅毎ゝうゝ月八ゝ水〻と〻く畢ゝ伝これとさゝひ日
と云天寿ゝく日もゝさ時すまい屋宅と修理して
功多ゝ〻れハ唐古典ゝ定役ゝ功として造修修理ゝと
ゝ〻ゝよ時行ゝ事とのきゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ功
と云二月二月八月九月を功ゝ云十月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝゝと紙功ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
修造ゝ功多ゝてなるのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
梅毎ゝく毎梅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ又和のむなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此月天氣よゝ時書畫等と日ゝ晒して元和の第ゝ
ゝく紙ゝ糊とつけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝめゝとれゝ徽ゝでゝと月金廣ゝゝゝゝゝ
衣服ゝ和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ桶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
晒ゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちく鮮なる塩鮭は塩湯にくゆひさらす湯に洗
し並べしと居家の心用ふべしと
七月うり白瓜きうりの赤豆大豆赤小豆胡麻胡荽蔔等也
純陽乃月なれば精氣と保養して益性すべしと月令
廣義にのたまふり又七月暴惡してんとと傷寒なる也
これと切りせば秋瘧とう事あり又霜水かく而と洗
ひ出すべき事といひむ
六月六味丸と服せば七月より始くのむべし男林集に
去夏七腎氣丸うち続し又六地黄丸と服べし
冬は味丸と根ちとろにとろしとろり六味丸腎氣丸

地黄乃八ツ分用ひ地乃八味丸は六味丸に附子肉桂と
かくさるなり又薬方に肉桂又味まとかくるものなり能毒八味丸は六味丸
治す薬理能生津液の力ありて六味丸より切要大
なり薬性能久しく根ちとろにとろしとろり
四月乃六候牙一螻蛄出牙二蚯蚓出牙三王瓜生ず
立夏の三候なり牙四苦菜秀牙五靡草死牙
六麥秋至ず小満の三候なり
立夏巳の十六刻十分巳午三刻五十分小満巳又
十八刻二十分巳午一刻四十分月令廣義

五月　節と芒種と云中と夏至と云○五月の異名　仲夏　皐月　律と難賓と云○五月の和名をさつきと云四月をうの月と云

作りとなりゆく　五月雨　時鳥　うと　卯月　後粽　五月

四日　沐浴　粽と蓑ひ　ひ　餅粽を裹とるふるもちゆ○と

用ひず　粽米とさんめくし　繭　ちまき　沸湯

てあね　ゆり又沸湯　みくりう　又うて米とりつ米

ゆりてあるまく　ずし　沸湯　て黄ちし　九ちまき

餅あとハ米と麻　て　ちまし　ハ日ちし　印ひくつき米

ちまき　又粽と　稲米乃原汁　みく黄へし　中

月令廣義　五月　たり　麻　代　端午　粽　て米多し

角粽　葵粽　角黍　百黍　九粽　粽と角　ちまき　ハ

又雑　ちまき　又黄角　ちまき　又竹の角　ちまき

まき　粽乃綿　みくり　ちまき

ちまき　数珠　ちまき　つ　ちまき　粽　国ふる　古へハ粽と安

伊勢物語　人　ちまき　又指遠集十八乃詞書　ちまき　乃条　かり　ちまき　れハ

ちまき　九　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき

ちまき　ちまき　角粽　ちまき　角黍　ちまき　ちまき　今日　ちまき　ハ

明日粽と親戚　送へし

○国信　今日　艾菖蒲と屋内のうに挾む

粽を角　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃

ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき　ちまき

菌佑艾菖蒲とのさに掛むとかきてさしかし
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲菖花をもて殿の
前にとしとあるはこれ時ものをけるとみてしり
又指艾掛は五月四日五殿寮草内裏殿舎菖蒲
をもてり指申納をこの雄乃ものは 玉葉
をもてあやめをもて殿をもて殿
をもてりめの蓮をもてやと
五日 端午と云又重午とも云 文徳紀 後九齢上大律暦序 漢武内傳元十六年八月
端午祭之 又宋陽の表に云く月惟仲秋日至端午とは八月朔月
乃八月を凡端午と稱とし一山月とのこと云へるとも世俗
ふるを月八日と 端午ニ稱ス 菌佑今日粽をもてひ菖蒲酒をもむ

且今日より麻の衣をもてく八月晦日に至
粽とて如る綿酢酒をもてを屈原の月五日
をづる汨羅に投して死を楚人これをあはれ
あり日に毎年竹筒に米を詰て水に
投してまれを屈の澤の歌乃時也乃歌
屈大夫と名乗同に祈くいてく我毎年五つ
車にれるよう祈こぶ塘より去れも常に
故魂乃こもよろ食物をぬとまり今まりれちく
接樹の葉をとくくのをとつをこ綵の糸をて

絡へ〜これ二月ねを挽ぬ乃ぬきとりとり
今日粽と食ふ八月ぬ出てきたりとり月今度報ぬ
し屈原ぬ姉名ハ嬢これとなりてこれを屈原と呼ひき
事と思へとり又粽ぬ魚鬼ぬよりとり魚ハ紙ち
切てこれと食ふハ鬼を清伏する義なりと安倍の
時明ぬ伝ぬ思へとりかうやらの徳ぬとに有
延喜ぬ伝ぬ月ぬ五日ぬ菖蒲ぬ風呂ぬ
入るハ菖蒲と云く徳ぬ来るとつゝ所けて菖蒲粽
これこれ酒湯ぬ包裹ぬ云くいまさ分数ぬ
とりとり作りぬ五月ぬ一日ぬ
すなわち菖蒲

包裹ぬ云くいまさ分数せす

又菖蒲酒とのむ事家ぬ雑記ぬ午
日菖蒲と云く絡乃ぬ云くし細末して酒ぬ
入てこれをの飲ハ湯気を助を辛とのぶゆ
とり山沢九節乃菖蒲しとなん草多とり
作ぬ菖蒲酒竟樗線

○又のすへぬ今日薬ぬして菖蒲ぬ切ぬ雑
十粒ぬ切ぬ色ぬ紅ぬ系ぬ云くとのくてひちぬかぬ
ぬ作りぬやきぬ典薬寮ぬやめぬつゝとぬ
又茅ぬ巳ぬ御帳ぬ入ぬけ〜ぬ辟除ぬ法ぬ行ぬ事の
作りしぬ迎 延喜式ぬ事根源ぬ云くとり又樗とも
茅ぬ巳ぬ作りぬ日ぬ紀ぬ〜みえとり

按ずるに風俗通に五月五日五綵の条に
脅に かくれい 長尺 毒と為て人をして疫疫とや
まざらしむ 一名を命縛 ていふ 色縛 一名を
縛臂といふ 裁ちて 五 採 桑 枝 小人 端午に
雑 絲 と 合 歌 と 結 ひ 五 脅 に 縛 と ひ か く
るを 意 ふ ら く
○又世俗に今日菖蒲湯と用て沐浴するなり
按ずるに大戴礼に五月五日菖蒲を沐浴せしむと
楚辞にも浴蘭湯兮沐芳華と見えたり今此人の菖
蒲湯と用て沐浴するは是風なるべし

○又今日婦人女子たるものは菖蒲を形どりて
髪に挿す 如此 これ 病 を 除く と 俗 に いひ ならはす
案 附 雑 記 に 端 午 の 日 菖 蒲 艾 を 刻 て 小 き 人 形 に
作り 又 は 蒭 蕘 の 形 に こ し こ れ を 常 に 用 ひ 邪
を 除 と 称 せ り か く ま で 信 ず や 正 に 怪 し む
べ き 明 証 な 是 天 中 節 旋 刻 菖 蒲 要 辟 邪
又 玉 燕 釵 改 艾 虎 輕
○今日京師 紙 屋 川 紙 ふ く 競 る あ り 彼 友 七 日 の 祈 り
潔 斎 と して 素 の り も 数 二 十 疋 翌 日 よ る 乃 是 を と て
ろ く て 一 二 の 者 と 定 め 日 る い 裂 来 と 思 し て 是 を

二つより日ましに勝負乃本にて弓場乃西の方に楓林
ありそれより小さて落てうと茶とてれうと見とすれ
ば此法人羅集とあるに成故よる物れあてうハ世くて
大なる樹に樹よのりてくやとなに見るとなりる弧
附よ横数なるい立てうるのい場れあてうに
ものうるさうり枝をつくてこひなるくたせあるを
見るにうるうるに羅集此中へけこあばるんべるいま
こふ竹林とつ行くるる乃改りさらよなりなと打
たつ出るる出家とこぶがくくに跪り成りなりて
横よこれ祭るいもちに此いまこ成さ出くたよりこ

無よあり事をうしあをあり又人る川中まてこ弧り
りて川よとち衣裳とぬくてくるこりこさひ生を
潔斎とたるくとここ出こ成して客人の縁たるよりに
こ行さるるす歳るるとこ出り元賀茂の村民社人
なるす事よあるされこつ移よ化而乃出とこ又
取出此出こを人よりこ成たるるる縁出といむ而地
むしい大間武庫殿にて毎日に読る読射乃事
りてて毎位此こ出こるとなるとして延喜式よ出るせり
祝多御情よいくくの月此節天皇あやめ此こと
ク事行くく武庫殿了紀幸りて六府弦射乃事りり

五月はつかあまりいとけなき人をまねきて菖蒲の御
ゆをくみて競馬の事なりこれ今賀茂のくらべ馬の是決
五月五日競馬とかいふ人乃弾射走馬乃儀式なり
拾遺抄文昌雅兼の端午日走馬賦之瀧柳と
あるべきなりこれ今日なりとて此の御
○今日山城紀伊郡淀乃里男女森の祭りた
ぶとまつりて競馬あり沙神を延喜式にとりたる
乃神社なり日本後紀に賀茂神の別也
とりそなへらるゝ三所此男子とと此所に祭る
ゆゑ良親王伊勢初瀬井上内親王也今日祭

あるひとをまつりてうまいをそなへ天皇乃御宇天武元年
五月国乃山城真木尾山に天皇乃御宇天武元年
淀乃ゆゑ良親王に大和軍をもて宣旨あるべきなり宣
旨ありて山城国神社に行幸ありて
大和乃神武天皇乃御宇に行幸ありて大風波
とひ来りべし神武バ吳城一城をもて淀乃
ひとをもてくるなりろびをもて出なり
平城乃御宇とあるひけりとやゝ乃郡の事乃今
日葛城のかぶと方ともなりたるなりとは
なりはじめ事むりしい人形とか

つまは紀枝を貫き形こうらく家荒の業にくるとゝ
作り武木を結ぶ力のつくるづけをして戸和を立
作りしうを年八風俗美巧とものをして本とりて
人を形とさ作を又たりこれて家をなどさ
武甲冑をとを世剱とを世鞍閑の勢をかさ
色をく戸和よりて作りを色をかぶくゆふ紙旗て
いろくの絵とり作くを年よつ者色を戸和を
たく作りこれとのぶりと云武維と用りをなり武ハ
ち旗をかえて色と作をたゞしと云朝日よりゆ日ま
て四季を形事こうを

拾ををこをりこれを作る事作業河
雑紀ゆいくく端午ゆ静の人天師を畫て真
又土ゆく天師を作り艾を作く蒲を
いく米を門上ゆ玉又艾を採結て人の
形に作つを戸のよりかけれハ毒事をはくと
ゆり　拾遺抄に乃ち後漢の張陵と
祀師をして天師と云
○今日ゆよゆ竹を作る事作く荊楚歳時記ゆ又月
又日四民競ゆ百草又百草を闘しむ乃歳
ありと云ゆ世りを云れハゆ一へりをとりゆ
日本紀ゆ薬猟と云ゆ　章分ゆ帖を作て百草を闘香苦
ゆ事をいり

又章茅云り婦人今朝厨草は宜男と云り歌に
厨子乃行小芋風今朝菜盈筐百草の香を心得
百草のけを持うり摯く青うり膏薬に配さと
ゑて百病癒癒を貼して芋の膏薬よりも功十倍
せり又今朝日未出前百草を採て汁とつき出し
石臼にて搗て併うり治絶す一切の金疾と治
むと月令廣義に見えたり　百草と取る牛膝漢漆百草
牛膝を脂とまぜ沢漆　菜とをうすと帯伝記略
○張華博物志に五月五日なり又艾人を作て門に
蓬蒿の人ゑ五月五日採艾作百病　九艾を上巳と端午に飾りとり

と但艾乃苗ゑでうらに付ろうりよりしと戦国策英に
乃えてうり市にうり艾を作ることまりへ又様付のし
れい用へりしされも伝伝ちくさい作りし又紫金
紙を金丹千金方なと合ひりまと今日より
○又今日菖蒲をうり事行りこれ屠苏とをとつ遠ゑ
なりうり家内祀よりうせり　月令通考に越地七月に菖蒲
浪に越る勾越よ始て祀せり
石屏り端午乃行
榴花角黍鶯膳新何房赤ゑ酒杯焼美江湖
老清宴也陀蒿艾上柴門
榴花上酒ゑ菖蒲浪濁醪今日猶解衣用

もつぱら頭痛快復雑録

十三日　此日竹を後栽へし事書に云日十三日と作碑
日とす又作遠日ともいふこれ日竹とうゆえいかか
疑ひ深しとも云り

晴日　陰雨

此月淫雨ふりこれと梅雨しるづく又微雨ともかゝり
梅雨に中肥ゑに英蕾石榴櫻桃などの枝とをひ
てさえ〳〵と月令廣義に見えたりしかは蕾を
つゝし薔薇水梔子と共に活又多家人功こ
ゝ記すと奴僕事と慶〳〵おこたりて家事調

ゝし梅雨久霖の中を奴僕をして蔦とかの足
屐とはきてつゝしむべし舊を書籍遠拘食物多と賜し
新に熱して苦を不菜蔬に芋ひ墻屋を葺ゆへ
を動廣〳〵又梅雨出と大雨に貯重茶と勢
とれいたれる美なりと茶湯に見えて下位日
とへてを作へり乎の又梅雨ふりて瘧疾を治へい
ゝれおとれし驚と他りこれと用ゆい贅〳〵
やとく衣服ゆ〳〵これと用れい所けのをもせ
糸塩ゆ食物を年号を見えたり
梅雨出入乃説絡こうして一決〳〵雅雅ゑ

そく開人立春の後庚子あり日と入梅そ〜芒種後壬子の第五日を出梅こゝに祈梅にいそく芒種乃後丙に行くる日を入梅そ〜小暑の後未あり五日とあり梅こゝに又祈金鍋にいそく芒種乃後壬に第五日と入梅そ〜夏至乃後庚子行くる日と出梅こゝに又書閉梅乃後壬子あり五日とあり梅そ〜小暑乃後壬子の第五日とあ梅こゝに元梅にいそく芒種の後丙の日と第五と入梅そすと云是よりそ〜そ〜の夏溽炎熱ますます諸所と乃えそり元梅に成かへの

梅雨乃後ゆゝしく乃後作るゆゑそれそれの説合〜〜換軒嘗蕎徽雨後いそく洗湯之法東園有之乾物天地潤乃変化受之形成異風而之時候必有正遠云万物自数紀別梅而出入之期雖然夏〜義恐云の梅信亜夫伝書不如書説式此言乎呂氏芒種後溽而初伏之日為入梅溽而收都日為梅庶業乎其不差矣十月溽而云極也世俗入梅之後生乃こゝいふゆゑ重夏間作いそく又月乃中こゝ十一日にあゝ乃ゆゑ日にあゝ乃ゆゑ日不浄とひ宜不犯浄然不食又幸酒肉日乃

梅と海よ蓮豆乃物に麻那支人の中信氏毒なり
ゆふ善そすとなし蓮事とのぐくとゆり手ゆりふこ
中夏生八七十二候乃内夏の末三候なる生八毛に
除今して毒抜をとめるなり
夏至の日井と浸水を改れい疫疫をやすべと注氏孔俊
志よ見てこうり又夏至乃後丙丁に行ふ日支梅の支
とをれいたにあしくと千金方にたりきり
氏月乃初青梅と元皮とをづり樣を去蕊よ八出上り
はり重く後收用く烏梅ゆ皮あつきはやく取
へしく又梅つき梅刃をと養ゆへし

世月米苞を改米ぬくし喪くらゆ苞ゆりめハうすす鉢
生ゆ又夏乃日拾殻乃原と多く米苞にぬり虫ハ不出
氏月天樞中脫もよ魚し異月のくをけううめ保ちすくし
又樗葉と保醤とくし格致餘論よいくく古くし格文忠粕
宿石漢味蔬し葉し於虫渡也保生金水二臓西蝕火土
之胆东
月令よいくく早月ゆ日出玉注陽年死まゆ男子節戒ゆ必
掩別母漢出考色母或進蔬法生母改和節者欲定ん乱又
回毛月ゆ可ん居る明可ん圭脳生ん外乙渡ろん生蔡樹
保ま人猶よいくく毛月拓井及深年乃中とうるなられ毒

切り〳〵先雛の毛とかくその中にとゝ入るよろしも
旋蓋とゝもの名とれいちこれ毒なるもの
此月巡とてくい力さり〳〵目を拔ずく金匱要略よりて
こうり又煮併鯉魚雑及未熟せざる果とゝ煮すかられ
鼈と鮑魚と却れじく食べうゝ又枇杷と桑肉熟と遊七
れるじく食るなれ月令度義あり叢書にもあり平金方に猪鹿の肉
と食るるのゝ也又金匱要略よる六月泥中の停水と
飲るなれ魚鼈乃精既に腐りたるとのめば癩となる
六月農人い田に苗と植へ〳〵又圃に大蒜乃たねとう
ゆへ〳〵刻日まいさとおりつへ〳〵

又月の六候第一蟋蟀壁に入る第二鶪始鳴第三反舌無聲
六芒種に三候なり第四鹿角解第五蜩始鳴第
六半夏生六月乃三候なり
芒種巳六十刻二十分夜三十九刻四千分夜五巳
六十一刻三千分夜三十八刻三千分月令度義

六月 節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名季夏晩夏
徒を林鐘といふ○六月乃季夏晩夏
てさとゝ云ふ泉ろれつきゝ
こゞなり月といふと略せるとう
朔日 賜冰節とゝつく今日冰を食るなり物をとるて
仁徳天皇に六十二年六月に額田大中彦皇子闘鶏せ

ゆえに冬にかりて出ひまひとなる路中を見やり
給ひしに人民庶屋と称りてやうなる仮屋人紙
つくりて見を給ふよ雇ありとて河内の山人
作りに作る人を給りて同世給ふ氷室なりと
中室なるその氷といひやうにて納むるとて同世
給ふ養てしさく出と一丈ばかりなる苔とそこに
あれた茅葺れとあつめ氷をおさむ其いう
やうなる大畧ありをそけを元と元く熱用と用と
あんそ河室より氷を伝達帝よりせ給ひ給れハ
それる虐感ありしより日年紀のをりを日本

ゆく氷とをる初ありを後より春をこれと
紙を風に取氷室とやれ作りをりを記世を
丹波のおくふよ氷室作りをるとをん又富士山麓
乃大ふをとりを氷と称せ氷室民間不一
蒼臘製せ粧とたくいく主今日含て氷を
らふよ準す

りろこをを氷とおさむる事あり周礼に凌人
職と云を氷室とつくるなり去を付極を
下深ふ密答り氷室とそうく色とおさめ夏
に至く暑をとさけんてあよ氷取出て殯に

ワラ綱ハ毛詩ニ二之日鑿冰冲〻ニ三之日納之凌信
と云り左傳ニ日至北陸而藏冰西陸朔覿而出之
と云り是ハ氷室を設て氷を貯ひ置ると云ふ事
乃石書紀三伏の日氷井を設て氷を入て大臣
以下諸卿に賜ふ
六日　粉麺を製する日なり製法ハ如常に詳なれハ
こゝに記し及ハず
十六日　此日星祭とて小ふるまひ歌林四季物語に云くか
しきりハ嘉祥と云て俗間乃ことに尾わの比ひ
て御代乃さひさ〻ハ吉祥ハ云〻哭哀上の日

五日乃ことく云つてハ云ふ心なり
て六月朔日ハ星祭ハ吉日なるゆへ日ハ
かりの人ハ吉日なるゆへ日ハ
て嘉祥とものを用ひられ年号なとも
ちゆ云て行ハ嘉祥と称ス云
ゆ伝ふ又延喜の頃ハ世俗ハ云伝ふ町家
た樹乃間ハ六月朔日の乃てびの云て揚ラと射
命ふものを貴人ハ用ひ
て食物と製ス云ふものとも
宋乃寧ニ元年号ニ十七年ありて年無ニ清ハ

御よ元年より十六年まてのあるしたる紙十六枚の
けをそく今日一人ここのりてすくれ候よ元むちあり
たれ申候たりのあるきれとあるいあるこやのこと
今物をあよ四季細絵乃絵よ三人いたのあり寄
まりあり後よ久しくたるすよ人作りきれとも延喜
江源江家三事根源年中行事を見て源ま
ちく國史ゆを志ろくまいあるを事ゆこそ学
作れ所ゆるの仮のこくちたせりれ事ゆるや
物　中朝の所言にこりうん人を行めこ
晦日　沐浴　さはこれ月てくへとる事ゆり世後風差ゆ見ゆハ

所をこれの却したること紙をつる功能乃作りあり天
武天皇乃御時ゆりちゆれり大紙とゆハ紫宸つ
ちく京宮一同に世しとゆにさくの事ゆ稿紙
ゆりとそい
これ月れあるこの紙を多人きちて女れいうち
のてこゆありとて言ゆとゆること見て法性寺
乃関白の御記ゆる
却て事これつたねてあるものをとりにさり
てをそくへ法ゆりおこゆ紙と法すへしと見てり後拾遺
集こおり和泉式部ゆ　又延喜天皇八年六月晦日大紙の紙図

とのひらたとりたれば彩色よ中上絵とゝりたる大よ図
ちくさ書のごとくの玉あり三月小閏月ばかり後
いつはこかいれいやといふよ後代三月よあるゝとゝよ
車高輪よりたそたり又今日門原にやく麻代参りて
人形と仏さ多沢みてこゝとゝるゝてゆゝかすす
と授物しゝ
いつ御物よいそく白月後彩絵とたゝくたゝひ方
ふなこゝと言ゝ江の島よ中串たてあるの
多れどけんしたゝ夕又花ひらすゝ後猴
て変成川乃みかゝとゝてゝ月ばりてゝん

こやえてくすり[illegible]月てくしゝ河系す
ゆゝ出さく月のあるたとそこいてきくと
宵時日ゆゝうこと出て四月いくゝ[illegible]
色寄ゝ乃酒よいてく乃月ゝ[illegible]人時
疑之古人宵月之比必出門系作猪又網原友縁
作之遊夜詩歌之無恒例也不限時日只秋時月
猪武之比賀人記佛倉小会人可参時月猪
之比俳之件猪宵月十三日也山猪よりれハ
猪よ時ゆゝ[illegible]
九月三俳しゆる作人多くひゝ[illegible]九月中

夜三月九十日ゆ出いかくとゝり伏とハ金氣伏氣九日
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]ゆゝ[illegible]
第三庚と初伏とし第四庚と中伏とし立秋の後
第一庚を末伏とハ[illegible]三伏と云元四十日極く
[illegible]す臘乃大寒に対ゆゝ[illegible]

裏面数〻後書と日々脇をへ〻新鷹より表
紙とりて拵す帯縄を無く脇をい表の様す
天氣好日のうちを一日にて一度なりく〻新う脇
〻年毎は拵む晩るい暴毎の墨たりちやく收
むへ〻屋下よりへて鷹をさす〻一枚毛て明
朔家に納む元書を脇すう一家より多脇とへう
らい暴毎のなりうまあり又多れい家如厳ひ
使くくと用ひす書をとうこなふすなり振蔵
あるい修繕〻新しとち毛と猶ひ縫くを故の
く拵中に納名をとのとなせて墨と用へ

屋中に久しを脇さんよりかくれくく刻日に一度脇
たるう雲をとに塵をくをくよ〻毎年久しくさせ
をもいまくう書に振嬉す〻古人を書と初よさ〻せる
〻見くうもえこさ色なしの表紙を表毛とりよ
さを毛のよをくう居毛を用よりくく古人書と毛
毛に多く墨毛と用く蠹をさく今八七里香こ
也なり　但七寸巾八山雙氏す寸く墨八又毛なり墨八毛な
乃ち納ハにやうて　紙巾の毛〻納〻ハ山雙氏す寸く墨八毛な
紙巾くかりなへ〻　又麝香と書厨の中よ入毛八蠹紙
けく一けく摔脳をと用うを又より
圖畫墨漬をと中一時脇日を脇へ〻毛を漬さ鷹武

浄紙を紙たこのとに巻〳〵縄のごとく年にかるを
たり〳〵久〳〵く晒すべし又閑晝のうちとるべし〳〵表
とさらべしうらをひとへたる紙とあくひろうさ
たるとまつ久〳〵袖よりをき方と結びすべし〳〵これ又
ぬきとれば裏をかへしたるもの也（道生ハ藍よハ四月の頃桃色のあり書
翻衣服みとさらしたること書ハ第一ハ
ちさと切りひ晝間衣服をかくハくく封して表ハかびあず
桃色にてハすべて之濃染と薄染とをいとり）
甲冑色色を布ゝもめん布とやらひて中村ちうと然日あ
晒すべし〳〵久〳〵を晒すべし〳〵すべてに物の奥氣さえ
て後黒目をよりて紙〳〵
衣服たとも晒すべし〳〵出産を久〳〵を干べしまた黄緋紅色

のの色たがやうの物ゝ晒べしすこれと晒せて
又ゝゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ衣月衣乃ゝひて色つきたるとハ
色ゝのけよひ〳〵洗べし〳〵ゝ痕ちゝ桃色のさねを
すりて細末〳〵して洗へハ色ゝ痕月ゝ色ゝ
ゝ物ゝ物ゝよりびゝゝ衣服とハ物ゝと契〳〵て洗へ〳〵と
ありゝ又居ゝ居ゝ仮ゝ衣服乃墨ゝ汚ゝ
仕ゝ仕ゝと細末〳〵ゝ服茶と茶ゝ合せゝゝ
ひ洗ゝゝ湯ゝて去〳〵てゝくゝゝ付ゝ後
洗のゝ〳〵又新天南星とゝゝ絹のけづ屯ゝ一ゝ紙
ゝゝゝハ自去又白板とすゝ仕て洗てゝよ〳〵沈ゝ

きぬれこの衣服とハ滑石天世粉各等分を末して
付粉末にして湯ハ又貧しき人ハ白米を研て白蔵又
汚れこの上粉とひ粉とひ粉ケ猪鹿汁にてこれを
のきハとれいちよう又麻と用ひ洗て色よし漆
こけ汁にて衣服と洗ふハ杏仁門椒等分にして
研爛して汚れこの上に塗ハ浄く洗ハ白蔵又白
汚れこの衣服とハ冷水にて洗ハ蔵又白衣と洗ふ
に蒙蔔乃黄汁にうえハ音蔔を細末して水に
入れて洗へハ白くなるなり　此事必伝
新こ生てこの菓樹をも細に包むこの上にとひ
ひ

日ふあてこの脚にしきざ海この菓ハ三年目に平
に手合方にいとく菓とさいく日に干てなれ菓
うちとくなるあまり南風用ひさる菓ハ翌日に切
新瓦器に入れ土ふくにとし新用ひ平にして
又ねすに一年をのれこと新しきこと九数乃
菓をめしとに一とこと元世代人菓と毒に貯へよく保
漬とれこの菓にたるに事を考に次業也花人を
去ひ病をいたひ拭れ拭きて收めたく人毒
乃ぬきざるやうにして收と陰つ風一ぬきこと
へこのくなる新瓶を多くに菓とへこと法のく

はとくに対し重くしめとれハ久しくまてを望
うせハ見事とかたりの良法なり地黄白芷黄芪
羌活門苦参茯苓黄芪甘草などハ時に晒されハ蟲
くらの酒なりを作りたるなどさしかるるなれ乳酒う
とくなり也
寒酒を煙へるものハ先く晒とへしうすに拵て紫し
へる酒に新日よ晒へうす日晒へうす日
屋下乃壁に触くこと重へしまとも絡はるくこと
あるよりけ重へしまとも寒中よりとい去ばく日よりと
へしに絡くされい蟲をもむまの抽を深くうの去ばく

物中に五穀ハ五倍子を浸して黄深ろ茶ハ元
寸と收ろ事也の黄湯ろ〻く軽粉と
酒へ寸郎とひくし牡蠣と絡くこれと收むへし
ふと絡てを煙す山居い門椒と黄連と黄しろ
汁みく椒黄と椒黄連と黄しろ
潛痘新書ハ足くろ又迎乃汁黄柳の汁みよ
浸してもう黄てを煙す又秋乃月寸寸
樓病と入重ハ煙ハ元寸と絡ふ黄湯ろ〻
ひ月ハれく黄して煙ろ黄れ寸と絡のよ
へい一宗絡てを煙すく農業椒寸に入てろ又也

魚類食たくとき中よりつけてとき出し指ひたし
月今度ゆきもちろ也うゝ又青生姜と切りて麺を
うどんのてくこねく間とろ味よつゝ汁の中ゝ入
玉ハ久しくて指ひ麺を併とりして食べくしゆ
ゆ茶碗ゆ見てうゝ又豚雪水を所玉てうゝ豆腐
と漬し玉ハ指ます
六月ゆ麦したろ茶とゆ味ろく等て
牡行くゝ酒ゆ又ゆてうゝ口と能ゆ
ぶ酒と指ゝ井の中ゝとるゆ麦のかしろに
ひしらかゝゆ切ゆ麦しゝ久しゝ切てゆ殺ひ

酒ゆかくよてくゝ玉ゝ
六月ゆ林ゆ出ゆ取ゆ苅と多く俵焼しゝ山林を
取ゆ多く買時玉ゝ赤ゆ味ろ時刻て晒て
ゝ又炭とゆ買貯ゝ
茶瓜を多買て麺とゝ晒ゝ
○瓜とうらゆ法　瓜とろゆうゝ
瓜乃片ゆれの四八九ゆ塩と入一夜押をうけ
翌日ゆ出ゆうゝ中ゆうゝ日ゆくゝ日ゆ
久しゝゆ入ゆうゝ又赤鷺ゆ使ろゆ八ゆ有て
後ゝ使ゝ

○瓜と糟漬のもろ法　世俗よりいつけと云瓜と云
毋さうの瓜をとれらくうらとこそ年たつひてあ氣
乃方たやうなかえうり瓜乃片はれの内ハ塩八分ぬ
ぬと入瓜ひつくさ九分内を入桶ハへすくくと紙
うけ二枚ひたくらを塩けてあるひて塩け
乃かくなくなるくはよりさく瓜ハ糟を多くぬうに
せをくを瓶ハ入なくて瓜のつきあるやうにてろれ
うハ塩を重ねおりしたくに重なり糟ハも塩ぬ
ま世くらし大抵糟を計ハ塩ぬ合ハせまくらう
糟多く瓜をくたけの瓜多く糟すくなたけ

信の瓜ようすに瓜とゆくし瓜ハかとつくろるもの
きていつり瓶のはりに風ひるぬやうにあるをしてとと
赤土ハくぬり重しを桶ハひろきゆく瓶ハ是を
をにつけろうしを桶ハつきにてをとてをさ
男とよくをくしを瓜ハこれくうつけくつきち
うし又紅豆花ハあるを一二枚塩ハつけ是ハと
うけくけとを糟ハけれハ糟美なり
瓢花ハかとを平把をうを武塩をして貯重し
○乾瓢乃製法　如天氣とうくひゆうをと度と
をつをて糟ハ切をを切ちを者うすくぶまりて

あつ入へ中後ゆ出やして縄なりけくりひきすり塩ゆ
天窓おしくいたのうくく水よ入天気好時ゆ出
縄ようきくゆ出し能ひ乾時壺ゆとよ入ゆ
重へし大ゆこくもりて後沸湯とうけくみゆ出い
文豆汁ゆ入るとしとを味あるて
○塩牛瓢乃製法　瓢を大片ゆ切塩ようつけて中と
うゆ重いつてを日ゆてうゆ時ゆ出して後つゆ
ゆ入納重ゆ生者のうへにゆ出すゆ中ゆ製
○乾茄子の法　ようゆ茄子をゆ出ゆ去ゆ二つようう
して平重ゆ用ゆ取ゆ乾ゆ出ゆ干ゆ重ゆ

ゆ加へし地ゆ取ゆ茄子ゆ炉の原ゆ
○豆豉塩淹の法　米糠ゆ塩ゆ入ゆ一くゆ塩ゆ
くゆ豆豉と炒ゆ清ゆ入ゆ一くゆ搗ゆ
ゆ入ゆ
ゆ月醤油ゆ納ゆ中ゆ製ゆ
○醤油乃製法　大麦　大豆　塩各一石　水二石二斗
煮ゆ
石臼ゆ引ゆ大豆と麦ゆ
麦ゆ粉ゆ
なゆ麹塵ゆ

一石とれば大釜にて煮湯を大桶にて
しらやきをひたしてをかつらかとなり
俵の内へ入てよく拌初より
家内にて五日目より五日目にて後
間よりあり出て立おかいてつかり流入て
みりをもて色を黒と入れ在れ紅麹みそくい白米を
よく水にて入粥よりて煮て塩を入れ冷して
四五日漬置て入れ日数三十日にて酒と
ことくなるとき桶のまゝにて完とあり桶
よりとくとりもすれば初

作りは一日より九七日にて出るつくりたり
流よりとり出て後美味拵たるよ昆布と切て入れ
味よくなるなり

○ひしほの製法　大豆壱斗　大麦壱斗　塩壱斗　水壱斗
麦ハ炒て粉にし豆ハ煮て引り皮
とり去まゝ炒て豆と麦と入麹と加
たる時水と塩とて入れ黄てさまし瓶に作り入る
作り入る後日に成日に味なり何月にし瓶の
口を能とかたく封ぬきさらやうにすくしまりされど
味よくなる家にて麹よりと米用合すると云

きくしゝ瓶の口をとぢ
ておく
○清酒の豆の製法　豆五升小麦粉六斗生豆
とをそして豆はこく煮熟し中麦の粉と衣とし
水入麹をすりこみて水六升塩二斗入て能煮て
桶に入さまし大麹とくこみて塩けの内に入又
黄こし生姜山椒皮陳皮たとこまかに刻て
生とも麹と一所に塩けの内に入てよくまぜ
をとけ豆は塩けうくとをもくをかけの
七八十日をへて味よくなる時分に麹をとり
おきてあるひまをのぬきてをとして壺に詰免をし

○又納豆の法　大豆六升塩六斗大麦六升
豆はこく煮こく麦をすこしつゝ粉にして大豆はあつ
き内に拌むしろをかけて一夜置次の日麦粉
を入かきまぜ麹を稀に成塩を入水は能くあ
よく入て七日をへて壺に新麻皮さんしようのこまかに
切麻陳皮を入二日かゝり出して
日よりして又物をとり出してあらためつまりを
○金山寺麦の製法　和州吉野の名物也　大豆一斗小麦
引ちり皮と去麻細くきざみ大豆一斗小麦一斗
能煮て冷まして洗ひ大麦と麻搗

乃天日にてつよく蒸し熱したる時細末の麦粉
を拌世土間に入れ世く麹にして麹塵の付
へき一日前に茹かせ置くこれも麦粉を混ぜ
合わせて瓜と同合乃塩を合せ桶に入れ漬け
一夜置明るとあるとれ麹をひたし瓜茄子を
漬申候かさせ桶に入れ上をしめ置くこと
毎日一二度宜敷世十月許に成て後蔔考
に糠漬に穀種蓼茎等を漬るよし拌又おの
くに成て漬て置毎日ときまを七十日
過く用へし三四十日よりよく味つく事後よかり

立味いと言うに人乃ぬかをよくしめ
○茄子の漬法　酢に酒に塩を合せ壺に茄子
漬くにと漬乃人は月土用乃中壺ゆるに水を
実日より脇に七十日をつくこれを用るのこれ
たるに酒に水を等つく入毎夜如此とれいにすれ
ば茄子方を漬しいかり又苦瓜乃茎を刻てあん
うを入れいに茎と共に苦瓜漬しも
日和よき時桶より掘出し塩を拭とし又
海地乃宅を畳に敷并と浸へ足泥とと言く
如海を入へし如此氣味よくなり

元刀剣強き刀鐵なと是月より変めくいされハ錆まし
花常乃時をしりくるぬくとしくしまた月を焼る歌
をしくとをしくしく

文月 故実と書法 蓼科 蓼本整仁二ケ 雄蓼 別所 仙上

細事して蓼こそ蛭乃ふしくるとれと蓼こそ長き
冷乃ふしくるこそ又蟹乃骨を焼ハ蚊時乃ふれ
骨をしくとべこそ川魚の骨い蓼こい時蚊とを又
浮萍と蓼浦とと蛭てをしくこそ月合廣義ふ見
こそ又千金月合ふいを月ふ浮萍と蓼く佐平ふ
雄蓼ふまをしく蓼こい蚊を解とをしくこそ月

又日面中の浮萍とを時乃ふれ無をとをくこれふ
浮くこそ又時くこそ浮すれをしくこそ蚊をして後まして
蓼こそ焼こそ大ふ蚊蝿とをこと長き和俗ふ見てこそ
麻の蓼とけこそふけいふく蚊をさこそふ和ふれ蚊
蓼ふ見こそ和俗ふハ樋乃ふ和とこれふく蚊と
さこそふのこそかやくれ乃ふ和ふこそ
なこそくくこそ古今集乃歌ふ

夏ふをふいやとに蓼をとをこそふ川ふまてこそ
乃ふをこそふ也 清子大ふ蚊乃俗ふ

蓼泊拝扇摩羅去 蓼蛭蓼 蛭印伏隙

○又蠅多ふかいまつはるなとを教ふなひてうへなかく
出ハ蝿死ると云も和漢共歟ふ又蚤多きてハ
ふ蒼蠅乃事を席乃ちよひ移る又ちやうぶ乃葉を病
つゑく庶ふ志ふ人しと月令廣義ふ見えてり
文月乃頃世人暑ふあてて逆上ハ卒途中ふく倒ふ
病ふ死する事ハ多くハ暑ふ暍死ふ中暍ふ倒ふ
これを霍乱と云ふハあやまりなり此病人を水をひ
やとかうふひやせ水ハ暍ふ死ふものゆ温湯とよ
ぬくいゆふ温湯ハ脇の乃ちとあてゝむへしゝ
逆中まて死ふ人命も多ふ此上の藥ふを知

脇腹の乃ちよ切ふ人ふしてゆのよに居せしめ又薑と
大蒜とつき燭ふて熱湯ふて送下せハ即活ふ其後
薬とあたへて保生ひとへし
文政乃天氣暑ふふく清汗脈微弱力労過ふるふ
生脈散と服すへし病ふ中ふ病ふ清暑益氣
湯参芪益元湯等と服ふへし又暑月ハ薬と服
ふく生脈散ふ代へしと方書ふ見えてり
黄芪 人参 白朮 黄柏 各一分 五味 陳皮 当歸 俗ふ云ふ者ハ
白扁豆 各一分 五味子 五倍子 麦門冬 甘草 五味 右十味成
加蒲黄 一分 神麯 一分 黄柏

元異樹乃時粽を作りて供して後に食するなり
寿世保元よりこの六月三日房勝仰参二膏盲一又孫七人
ひとく反閉張乳門よりに伏し異毒かと慈すんよまる
せくに風るあり冷酒と食ふあり暴酒に寒と生じ泥
暖なる酒と食飲して大に飽るなかれ
鄙業に従ふものは日よりてもひあらと洗ふ時は疫を收
て水ありまよ洗へし屋日寒の葉しを用水をそけい
冷獺お通て粽を作ると月令廣義に見えたり又
老圃乃云暁よ起て粽を作りさめたる時あと洗へ今洗ふ
洗へくまよと但暁よりおもてく洗へし

月令廣義に六月より桃楊よ水とろく紀土とい茅
乃原羊の蓋と蘿ハ六月多し
秋の比鵰鳥秋ふくハ所ろしめ他とたし桃色と
鄙くし茅瓜乃株と咥くと又楊梅と他へし
比月蕣と食ハ目と賞す羊肉と食ハ神経と傷ら
聖息厨鶏菜菓と食ふまと又生姜と食ハ水瘧
とたるたのまよ嗜るれい絶対悪とたし冷食と言
用し冷水生破果池臓甜食とる食するなかれ
尾葵炒燻葵乃硬味に宜くゆく用へし 月令廣義
元文乃沼甜瓜とる食するなかれ瓜のまよ入て沈

このハ大に毒あり月令廣義ニハ之を食ハ人を殺又油餅と共に食ハ物動れ
蒂乃瓜人を殺又油餅と共に食ハ物動れ
咸志ニ瓜ハ白梅と合ハ速く爛と成て後
白梅と食し又麝香を忌く瓜と消化す又石首
魚と食すハ能瓜と消して水となると本草綱目
六月乃六候末一濕風至ル二蟄蟬居壁ニ三鷹乃
学習 大小暑乃三候なり中に腐草為螢 中五
土潤溽暑 中六月令 大暑氏三候 中
小暑 立秋 六月令 大暑氏三候 中
八刻二十分夜四十一刻四十分 月令廣義

土用 又土王ともいハ土旺と書す
ハ木旺ハ春ハ火旺ハ夏ハ秋ハ金旺ハ冬ハ水旺す
五行乃ハ土ハ四時に旺すと雖ども土ハ四時に
有ハ完れり信ずるなり氣なくして腐乃
物なり辰未戌丑ハ月の末ハ寄旺なり各
十八日一年ハ七十二日なり此七十二日を
ハ木火金水を又各七十二日づつ配
一年となる故に土を木と共に有ハ土
用ハ春夏秋の土用ハ土衰弱して威なし冬
乃土用ハ水と共に有れ土ハ

用ひ来る金銀銅鉄ハ世界に有よる
の土用と云て二十日土用ハ土に金を生じ
有る秋乃金を土より生ずるなり未だ見ざる金の
質あり又一説乃中央乃土一金を
生ずる説あり乃序となれ乃ち有る月金を
重ぶる次乃中央の土ものきり 祇園信南の百日
ところ〳〵その仮ちなるれハ
それ程なたるなるやや
俗説に六月土用に入日蘇及赤豆を食ハ疫疫を
辟て今の人ハ乃ちくさを事なりれハ浮民蘇
乃茅まれ来るこれねちけさやくをすりよ

作り家紙に伝ふ来る蘇なりと伝れハ伝
ふるこけらなるなるもとれ疫と
疫ハ赤豆に種吹いそく芽人西月節食五年一
辟厲氣 得蘇蘇 蘇亞蘇蘇蘇也又脚絆方に元日及
人日麻に小豆名七枝を春に疫疫を消すと伝
これこれ家初のまなひ事なるとこれ
事と伝へあやまりて六月に入すなや牧地獄乃
人に見あへし
六月土用乃中に稼くす
六月土用の内に鼈と塩を分作る人〳〵 泄潟下

血乃久しきやまぢを用ゐて張行やまと
養えたる病人は勇毒能 毒を解 小勇しやく
を書まく業てしら

日本案内記巻之四畢